平成23年度第２回企画展

収蔵品展　身のまわりの生活史６

女たちの手仕事

開催にあたって

お店やインターネットなどで、好みの洋服を安価に購入できるようになった現代では、売られている洋服を購入して着ることが一般的になり、「お母さん手作りの服」は少しだけぜいたくな感じがします。また、家電製品の普及などにより、少ない労力でこまめに、またたくさんの量の洗濯がおこなえるようになるなど、衣生活においては「ものすごく大変」といったことがない、といえるかもしれません。しかし少し昔までは、衣類を入手したり、洗濯をはじめとしてその管理をするのは大変な手間と労力を要することでした。

洋服ではなく着物を着るのが一般的で、「女性は着物が縫えて一人前」といわれていた頃、女性は家業に家事に忙しく働きながら、合い間に、あるいは夜なべをして糸をつむぎ、布を織り、着物を縫い、洗い、つくろい、仕立て直しをするなどして、四季にあわせた家族の衣類を整えていました。現代では想像もつかないほど多くの手仕事があったのです。

今回の展示では、「収蔵品展 身のまわりの生活史６ 女たちの手仕事」と題し、収蔵品の中から、女性たちの手仕事に使用された用具や、手仕事が施された資料を紹介します。

平成 23 年 7 月

宮代町郷土資料館

～　凡例　～

1. 本書は、平成 23 年 7 月 16 日（土）～ 10 月 23 日（日）まで開催される、宮代町郷土資料館　平成 23 年度第 2 回企画展「収蔵品展　身のまわりの生活史６　女たちの手仕事」の展示図録です。
2. 展示期間中の休館日は下記の通りです。
   7 月 19・25 日、8 月 1・8・15・22・29 日、9 月 5・12・20・26 ～ 30 日、10 月 3・11・17 日
3. 展示の企画及びポスター・図録の執筆、写真撮影、デザイン、編集は、当館学芸員 横内美穂が担当しました。
4. 会場及び本書中の敬称は省略させていただきました。
5. 図録の校正は、展示構成とは異なります。
6. 本企画展に展示させていただいた資料は、下記の方々から寄贈いただいたものです。ここに記し、厚く御礼申上げます。（五十音順・敬称略）
   青木千代子・伊草英雄・小河原悦子・小河原進・折原一・折原高・金子和生・小島雅郎・鷺谷国雄
   白川由利子・髙畑博・戸田義一・野本伊勢松・萩原一丸・矢部豊・横内澄江・渡辺研二

裁縫の道具

裁ち板

布を裁つ時などに使用する台です。表面をよく観察すると、布地にヘラで印をつけたときのキズが残っています。また洋裁でも使用したのでしょうか、ルレットのものらしき点線状のキズも残っていることがわかります。

張り板

着物を洗濯する際、いったん縫い目を解き、一枚の布地にしてから洗い、洗濯のりをつけて板に貼り付けて乾かします。その貼り付けて乾かすための板のことです。地面に立てて使用するため、端には補強用の板がつけられています。

張り板で乾かした布は、仕立て直して着物に戻しました。

絎台

「絎ける」とは、縫い目が表にあらわれないように縫うことを言いますが、絎台そのものは、裁縫するときに布地がたるまないようにするための道具です。L の字型をしたこの道具は、針刺しのついた柱の部分を、右利きの人の場合は身体の右側にくるように置き、正座をしたすねの下に台座部分を差込んで固定します。「安全かけ針」と呼ばれる洗濯ばさみのようなもので布の右端をはさみ、左手で左端を引っ張ることにより、布地がたるまず縫いやすくなります。

裁縫箱

ヒノシ

器の部分に熾を入れて、熱くなった底の部分を布地にあてて使用しました。ヒノシ以外には、コテもよく使われました。

炭火式アイロン

持ち手の所がはずれ、中に熾を入れることができます。このアイロンは重さが 2.9kg もあります。熱と重さにより、布地のしわなどを伸ばすのには便利でしたが、重さを考えると、作業が大変であった事が想像できます。

電気式アイロン

電気により熱くなるので、炭火式のものと違い灰の処理などがなく、温度も調整しやすい点が便利になりました。ただし、重さは 2.1kg もあり、まだまだ重いものです。現在のものは蒸気を出せたり、重さも軽くなったり、さらにコードレスになったりなど、いろいろと改良されてきていることがわかります。

ものさし

縫い糸（木綿）

縫い糸（絹）

女たちの手仕事

うち織り

「うち織り」とは、自宅で玉繭などから引いた糸を使って、自宅で織った布のことをいいます。昭和20年代の終わりごろまでは、自宅で綿を栽培したり、蚕を飼ったりしていました。特に、一つの繭に二つ以上の蛹が入ってしまった「玉繭」など、出荷できなかった繭を利用して糸を引き、その糸を使用して布を織り、よそいきの着物や羽織などを仕立てました。

家で織られる綿布は、縞や紺無地がほとんどでした。縞は、紺地に白や浅葱などの糸を等間隔に配した経縞でした。女性や子供用の縞には、黄や赤の色糸を加えて派手にしました。糸の染色は紺屋に頼みました。手織りの縞は市販品に比べて布地が丈夫であったので、普段着や野良着に重宝しました。

絹布は、養蚕で出た屑繭や玉繭などから糸を引き、織った布を紺屋で染めてもらうことが多かったようです。

また、町内には賃機で足利銘仙や白木綿、晒、ガーゼなどを織る家もあり、農閑期の余業として重要な収入源にもなっていたようです。

うち織りの羽織

戦後の物資の乏しい中で、自宅で玉繭などから糸をひき、その糸を使用して白布を織り、紺屋さんに染めてもらって作られた羽織です。

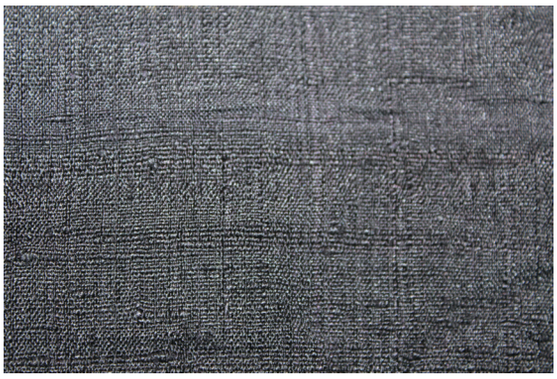
うち織りの着物

男性用の着物です。丈（たけ）の調整のために腰のあたりに縫（ぬ）い込みがあります。子供用に直したのでしょうか。縞模様（しまもよう）を織り出す経糸（たていと）の配置色は、薄茶（うすちゃ）4・紺（こん）4・茶2・紺4・白2・紺4で一組となっており、これを繰り返して縞にしています。緯糸（よこいと）には、紺の糸を使用しています。

ところどころ、緯糸が太くなっているところを見ると、緯糸は自宅で紡（つむ）いだものを使っているようです。　↑織り目拡大

うち織りの羽織

玉繭から引いた糸で織ったようで、ところどころ糸が太くなったりしていることがわかります。



↑織り目拡大

女たちの手仕事

糸を紡ぐ道具

ここでは、うち織りも含め、布を織るのに必要な、糸を引くための道具を紹介します。

クリダイ

収穫した綿から種を取り除く道具です。2本のローラーの間に綿を通すと、白い綿の繊維(せんい)は隙間(すきま)を通過して向こう側に落ち、種は手前に落ちます。綿を通す際には、綿を湿らせてから灰をふりかけよく揉んでからおこなうと、ローラーに引っかかりやすく種がよく取れたそうです。

糸車

おもに綿から糸を引くときによく使われました。国語の教科書に出てくる「たぬきの糸車」でよく知られています。

イトワク

大枠(おおわく)とも呼びます。紡いだ糸を綛(かせ)にするための道具です。綛(かせ)とは、一定の長さの周囲を有する枠に、一定回数糸を巻いてから枠をとり、束ねたもののことです。こうすることで、糸の長さがほぼ同じものをつくることができました。

ザグリ

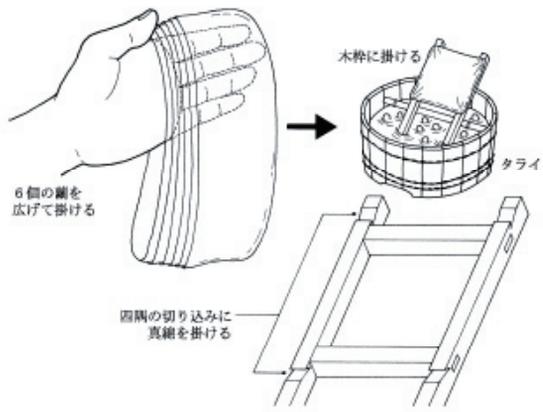
糸枠(いとわく)に糸を巻くための道具で、主に繭(まゆ)から糸を引くときに使われました。中が歯車の構造になっていて、取手を回すと「手振(てぶ)り」と呼ばれる棒が左右に振られ、糸枠に均一に糸を巻き取ることができました。

ボウズ

黒瓦質(くろかわらしつ)のこの真綿掛けは、作ったばかりのまだ湿っている真綿を乾かすために使用しました。口の開いているところに熾(おき)を入れると、上部の丸いところが熱で温かくなるため、この部分に真綿をかけ乾かしたのです。

真綿の作り方

まず重曹入りのお湯で繭を煮て、やわらかくなったところでタライの水に繭を移します。これを指でつまんで軽くゆすると膨れるので、指を差し込んで割り広げて、中の蛹を取り除きます。そうしたら図のように6個の繭を広げて重ねて手で持ち枠に掛け、これを6回繰り返し、36個の繭から1枚の真綿と作りました。



真綿はハンテンなどに中綿を入れる場合、薄く伸ばしてその上下にあてると、中綿がずれてしまうことを防いでくれました。

女たちの手仕事

繕う

ここでは、繕いのある着物や、布の再利用をしている着物などを紹介します。

裏側に再利用した布が使われた前掛け

服の裏地を再利用し、前掛けの裏地として使用しています。赤い点はつなぎあわせた所を示していますが、袖ぐりのラインがうまくつなぎあわされていたり、開いた穴を繕っている様子がよく分かります。

繕われた女児用の襦袢

穴の開いた所に、裏側から共布をあて、効率よく繕ってあります。襦袢は肌にあたる下着なので、このような繕い方になったのでしょう。

繕われた着物

男性用の野良着のようです。傷みやすい脇の部分を、繕ってあります。外側からは目立たぬように、けれども丈夫になるようにと、工夫が凝らされているのがわかります。

女たちの手仕事

賃機

昭和初期までは、農閑期に機屋からの下請けで賃機を織る家が多くあり、また、女手の多い家や規模の小さい農家では、田植えや麦刈りの時期を除いて一年中賃機織りを行いました。

賃機には絹と木綿があり、絹は足柄銘仙、木綿は布団側、裏地、白木綿、ガーゼ、晒などでした。織るための糸は機屋から渡されました。糸は約 10 反分が一単位となっていて、織りあがったものを 1 反ずつに切って納品しました。

銘仙は、先染めの平織りの絹織物で、光沢のある風合いと、大胆ともいえる柄行きが特徴です。絣の技法を応用して織られたこともあり、伊勢崎、足利、桐生、秩父、八王子と、関東地方にはいくつもの銘仙の産地がありました。それぞれの産地で、特徴のある銘仙が作られました。

ここでは、産地は特定できませんが、「銘仙」の着物を展示します。

銘仙の着物

銘仙の着物

銘仙の着物

展示資料一覧

資料名	旧蔵者
絎台	青木千代子
裁縫箱	渡辺研二
裁ち板	小島雅郎
裁ち板	小島雅郎
張り板	渡辺研二
張り板	渡辺研二
ヒノシ	矢部豊
炭火式アイロン	野本伊勢松
電気式アイロン	白川由利子
ものさし	小河原悦子
縫い糸（絹）	小河原悦子
縫い糸（木綿）	小河原悦子
クリダイ	鷺谷国雄
糸車	折原高
イトワク	青木千代子
イトワク	伊草英雄
ザグリ	金子和生
ザグリ	伊草英雄
ボウズ	萩原一丸
うち織りの羽織	戸田義一
うち織りの着物	小河原進
うち織りの羽織	高畑博
端布など	高畑博
裏側に再利用した布が使われた前掛け	高畑博
繕われた着物	小河原進
脇が繕われた着物	小河原進
繕われた女児用の襦袢	高畑博
銘仙の着物	折原一
銘仙の着物	折原一
銘仙の着物	折原一
銘仙の着物	折原一
銘仙の着物	横内澄江

宮代町郷土資料館